スティーヴン・ホールにおける建築的現象 ARCHITECTURAL PHENOMENA IN STEVEN HOLL

小野 育雄*
Ikuo ONO

The intention of this paper is to make a thematic explication of the structure of Steven Holl's methodology in creating his works by means of analyzing his words. The analysis is described in four chapters as follows: in chapter 2, the structure of Holl's words which means his concept "phenomenal architecture" is explicated with a dichotomous schema. In chapter 3, as suggested by the structure of a schema which explicates the phenomenological reduction, Holl's "physics" and "metaphysics" are explicated schematically, and it is shown that the shift to "metaphysics" from "physics" in Holl is nothing but the phenomenological transcendental shift. In chapter 4, it is clarified that Holl's "idea" is discovered in the shifting process of the phenomenological reduction called "metaphysics", and it is also acknowledged that the "idea" constitutes a counterpart of the "design" which is located in the transcendent-optical phase. In chapter 5, as based on the considerations in the previous chapters, and also as suggested by Tomoya Masuda's ontological schema, as well as Masuda's words that describe the schema, the whole structure of Holl's methodology is explicated with two schemata.

Keywords : Steven Holl, methodology, phenomenal properties, site, idea, design

スティーヴン・ホール, 方法論, 現象的なもの, サイト, アイデア, デザイン

1. はじめに

スティーヴン・ホール (Steven Holl, 1947-) は作品形成する一方で、自らの方法についてつよく関心を示す建築家として知られている。建築史家ケネス・フランプトンのデータによれば¹⁾、スティーヴン・ホールは 1974 年から 2002 年までに計画案やインテリアデザインのものと合わせて 110 の作品をつくっている。そして同データによれば、それら作品化とともに述べられる、建築することについてのホール自身の思索の言葉を掲載する書籍は、1977 年から 2002 年までに 37 ある。これらホールの言葉に含まれる建築することを思索する道 (方法) を示す構造の解き明かしを本稿は企図するものである。

本稿は、その肝要部において、現象学的還元についての二図式²⁾の構造に示唆されて、ホールの言葉にみえてくる、建築することを思索する方法論を示す構造を解明していくものとなるのであるが、ホールの方法論をこのようなかたちで構造解明した先行研究は見られない。

2. ホールの言葉の構造

ホールの方法論にもっとも影響を与えたものとして現象学者メルロ＝ポンティの思索が知られる。ホールの思索の中で幾度もメルロ＝ポンティの思索が参照される。たとえばホールはこう記す。

絡みあいとは、内から外に交替する「あいだ」をもつ。われわれの身体は建築空間の実体を通じて動く、と同時に、われわれの身体は建築空間の実体と一体化する³⁾ [In, 16]⁴⁾

このホールの言葉においては、感じる・見る・動くわたしという身体の項と、「建築空間の実体」やわたしの身体ほかという項、すなわち知覚しつつ動くものと知覚されるもの、この対となった二項の関係のことが記述されている。「われわれの身体は建築空間の実体を通じて動く、と同時に、われわれの身体は建築空間の実体と一体化する」とは、知覚されるものが、知覚しつつ動くものつまりわたしという主体(身体)の「外」に(客体として)ある、と知覚しつつ動くもの(わたしという主体)にとらえられている、と同時に、知覚しつつ動くもの(主体)は、自身である当の知覚しつつ動く自己の身体が、知覚されるもの(客体)の側の一部となっているとも(動いて・感じて・見て) 気づく、すなわち、自身(主体)が、「外」にあるはずだったもの(客体)と一体化していることに驚く、そのことをホールは記述している。ホールはこのようなく交替する>事態を記しつつ、メルロ＝ポンティに倣い、その事態をくあいだ (between) >やく絡みあい (intertwining) >と呼ぶ。「絡みあいの建築 (an architecture of intertwining) [In, 7]」をつくっていくとも記す、ホールの用いるく絡みあい>という語は、メルロ＝ポンティの用いた重要語にあたる。ホールはつぎのようにくり返す。

* 広島女学院大学生生活科学部生活デザイン・情報学科
准教授・工修

Assoc. Prof., Dept. of Life Design and Information Science, Faculty of Life and Environmental Science, Hiroshima Jogakuin Univ., M. Eng.

三次元のなかで、身体という自己自身を、建築という複数のランドスケープで織り上げられたもののなかに挿入し、かつそれを逆に身体のものへ挿入するという、相互挿入は、同一性と差異を産する。自己自身のこの挿入とは、自己を建築という他なるものに絡みあわせることである。⁵⁾ [In, 16]

<絡みあい>という、<あいだ>という事態を自覚するとき、建築的存在においてこの事態を含蓄する「現象的建築 (a phenomenal architecture) [In, 16]」という概念もホールに生まれる。<現象的>とは、<あいだ>に<自覚的>ということである。メルロ＝ポンティが客観的身体 (corps objectif) に対峙させた現象的身体 (corps phénoménal), その<現象的>と同じ語の用い方である⁶⁾。科学の行なう世界経験の態度としての自然主義的態度において出られる客観的世界の、いわば手前にある、生きられた世界 (生活世界) へ還って記述される身体が、現象的身体とよばれる。生きられる世界としての知覚野すなわち自然的世界への還帰は、日常性⁷⁾ (非反省的生活) としての自然的態度に終始するのみではかなえられず、徹底的反省 (réflexion radicale) としての現象学的<還元> (現象学的態度への<還元>) とともに開示される⁸⁾。ホールは

「絡みあいの建築」が日々の体験による現象的建築と結ばれる⁹⁾ [In, 7]

と記す。

開示される<絡みあい>とは、ゲシュタルト理論における反転図形の動性が示すような事態であり、相互侵蝕的事態、相互包摂的事態であって、メルロ＝ポンティによれば、「わたしの右手が物に触れようとしているわたしの左手に触れるとき」わたしという「触る主体」が触れられるものの地位に移る、といった、手というわたしの身体の二重性の例によってまず説明される。そこでは、触れるもの (見るもの) と触れられるもの (見られるもの) という対の二項と、それら二項のうちでの相互反転がとりあげられる。メルロ＝ポンティは、その例とともに他の諸々の二項についても記述するなかで、二項は<裂開 (déhiscence)>と呼ばれる対化 (accouplement, Paarung) においてあり、それら二項に裂開する事態そのことを含め、相互反転し (絡みあい)、ひとつの、実体的には解釈できない<肉 (chair)>=<存在 (l'Être, Sein)>を織り上げている、と論じる。つまり逆に、二項の成立を、この<肉>の裂開=<存在>の表現とみる。¹⁰⁾

ここにおいてホールの言葉を簡明に図式化してみよう。

自己	—	建築という他なるもの
(身体という自己自身)	(建築という複数のランドスケープで	
	織り上げられたもの)	
(われわれの身体)	(建築空間の実体)	

図式 1

中間の実線は対への裂開とともに二項の相互侵蝕的、相互包摂的事態をあらわす。この時この図式のもつ構造を指す概念が、<現象的建築>である。ホールは「現象的建築というこの鮮やかな交叉 (this fresh chiasma of a phenomenal architecture) [In, 16]」と記す。

3. フィジクスとメタフィジクス

—site の二重の意味

前章にみたホールの言葉が示す構造は現象学的<還元>の<終局

>において開示される事態であったが、現象学的<還元>の<全幅>構造を図式として示すものの一つとして、図式 2¹¹⁾ がある。

図式 2

N は自然的態度, E は自然主義的態度 (形相的態度), T は超越論的・一事實的態度, Φ は現象学的態度である。N—T, E—Φ は超越論的移行にあたり, N—E, T—Φ は形相的移行にあたる。したがってこの図式においては<還元>のルートとして N—T—Φ のルートと N—E—Φ のルートがあらわされている。この二ルートを考えたのは, T と E の態度へ適切な位置を与えるためであったろう。N から Φ へという<還元>の移行を逆行すれば<超越>の移行となる。ホールのとりあげる<絡みあい>や<あいだ>の事態とは, N の自然的態度から Φ の現象学的態度への現象学的<還元>とともに、「始元的な体験 (primordial experiences) [In, 11]」世界 (自然的世界) としての生きられている世界への還帰 (世界内属存在的¹²⁾ 還帰) として開示される事態であった。ホールはつぎのように記す。

われわれの目指すことは建築を思索の或るレベルへ高めるとともにつよい現象的なものをもつ空間を実現することである。¹³⁾ [In, 16]

<あいだ>や<絡みあい>に建築家が覚醒しつつ制作するとき、<あいだ>や<絡みあい>が建築作品において建築家の制作によって増幅されてあらわされうる、「つよい現象的なものをもつ空間 (space with strong phenomenal properties) を実現」できる、とホールはとらえている。ホールにおいては、建築家が建築する (建築作品を詩作=制作する) なかで考えるときのその思索が、存在の秘密を解き明かす思索たりうるのであり、そうした建築家による建築作品は、身体のもつ神秘的な謎を、あるいは身体と世界との神秘的な謎めいた関係が織り上げている存在を、みごとに増幅してみせてくれるもの、ととらえられている。

ホールは建築することを、その site をつぎのように記す。

site は建物のフィジカルなそしてメタフィジカルな礎なのである。

site と建物との機能的な諸相の解決、つまり諸ヴィスタ、陽光の諸角度、サーキュレーション、アクセス、これらの解決は、「フィジクス」である。この「フィジクス」は建築の「メタフィジクス」を要求する。[略]

建物は、場所と融合することによって、状況の意味を集積することによって、フィジカルな、機能的な諸要求を超越する。[略] site を照顧することは、その site のもつ「脈絡」のごく平易な複製品をつくることではない。つまり、場所の相貌を明らかにすることは、その場所のもつ「見かけ」を確認することではないであろう。したがって、見ることの習慣的な仕方は当然遮断されることになるであろう。

建築と site とは、体験的な結びつきを、メタフィジカルなつながりを、詩的なつながりをもたねばならないであろう。[略]

或る建物は— site をもっている。この一状況内に、その建物の諸志向が集められている。[略]

[略] 建築と自然が場所のメタフィジクスにおいて接合される。¹⁴⁾ [An, 9-10] ([] 内は筆者による補記。以下同様。)

site は状況 (situation)、場所 (place)、自然 (nature) とも言い換えられ、建築 (architecture) が建物 (building) とも言い換えられている。自然の事象としての site と人間の事象としての建築とのフィジクス (physics) におけるむすびつきのための解決が、メタフィジクス (metaphysics) におけるむすびつきを要求する、と語られている。メタフィジカルなつながりは、体験的な結びつき、詩的なつながりとも言い換えられている。

今日、平均的日常性において site を見るとは、ホールにとってもわれわれにとっても、実在する景観の部分としての物質 (客体) としての site を見ることである。このことは図式2のNの自然的態度に属する。建物を景観の部分としてたんに物質として見ているとき、われわれは同じ態度に属する相において見ている。われわれが、見る者である自己の身体を、反省以前の見るという知覚においては知覚の主体とたんにとらえるのも、同じ態度に属する。自然的態度の知覚には、それによって自己自身に自己を隠し、それ自身に与えられる<現象>を忘れて対象の構成に向かおうとする傾向がみられる。図式2におけるEの自然主義的態度に属する諸科学 (sciences) の行なう客体的世界の構成 (対象の構成) の、この自然的態度への湧出も、その傾向に含まれる。(そのとき、site という語によって代表されているその場所の状況を含む一切は、建設することなどとの関係において、site という道具として見られている。site はさまざまなものからなりたっているが、site のこの場合の site 性がそれらのもののなかに隠れていて、日常的に site を見るとは、site という道具として、その働きにおいてそれらのものを見ている。それが見定めようなものであるかどうかは疑わしいにもかかわらず。)

フィジクスとは、<物理としての自然 (physis) についての学>のことであり、図式2におけるEの自然主義的態度 (形相的態度) に属する。フィジクスに含まれるものとして「site と建物の機能的諸相の解決」をホールはまずあげている。

そしてホールは、建築するとき建築家が、site を、建築する建築を、それらのむすびつきを、フィジクスの属する態度においてや自然的態度においてとらえることからいったん離れ、すなわち<還元>し——「見ることの習慣的な仕方は当然遮断され」¹⁵⁾——、手前の、生きられる世界 (生活世界) へと還帰して、とらえねばならない、と考える。その意味でホールの用いる語メタフィジクス¹⁶⁾とは、超越論的移行を経る<<肉>><存在>についての論>のことである。図式2におけるTの超越論的一事実的態度やΦの現象学的態度に至り開示される還帰を意味する概念である。

ホールの考える建築することにおけるフィジクスとメタフィジクスを図式化してみよう。図式2に存在論的と存在的を区別する存在論的差異の関を示す二点鎖線をあえて引くと、図式3の左の図式となり、二点鎖線の上方が存在的な相、下方が存在論的な相であるが、

図式3

この左の図式に対応させて、ホールの考える建築することにおける

フィジクスとメタフィジクスをえがくと、図式3の右の図式になる。ホールにおけるフィジクスとメタフィジクスの差異とは存在論的差異である。存在論的差異の関を示す二点鎖線を越えフィジクスの相からメタフィジクスの相へ向かうことが超越論的 (現象学的) 還元の移行である。——簡潔に整理しておこう。見ることの習慣的な (現在において常識的とよばれる) 仕方が、Eの自然主義的態度とNの自然的態度であり、<現象>を忘れて対象の構成に向かおうとする傾向をもつ。建築することという人間の事象である制作をはじめるとき (この制作するということがくすむ>ということを含むならば、制作することになんらかの手を染め始めてのちさらにつくりだしてからも) 自然の事象にあたる site を前にして、site (と制作) を、日常性において (今日ではフィジクスの湧出を含みつつ) とらえる相がNであり、(site と) 制作を、フィジクスそれ自体によってとらえていく相がEであり、そして、制作と site を、ホールのそうよぶメタフィジクスにおいてとらえていく相がTの超越論的一事実的態度とΦの現象学的態度である。——

4. 還元という方法における idea-design の両義

ホールにあつては、建築家は、現象学的移行、生きられる世界としての自然的世界への還帰、すなわち、メタフィジクスにおいて、site を、制作する建築を、それらのむすびつきを、とらえるとともに建築制作することとなる。先ほどの引用箇所に含まれる言葉、「site を照顧することは、その site のもつ『脈絡 (context) 』のごく平易な複製品をつくることではない。つまり、場所の相貌を明らかにすることは、その場所のもつ『見かけ (appearance) 』を確認することではないであろう。したがって、見ることの習慣的な仕方は当然遮断されることになるであろう」とは、超越論的 (現象学的) 移行の端緒についてふれるものであった。ホールはさらにつぎのように言う。

site は固有であり、したがって design を主導する idea, design を主導する力は、周囲環境の置かれているその場所をめぐる発生しなければなりません。はじめは直観的に漂います。言葉や文章を書きとめ、ドローイングやスケッチをたくさん描きます。或る idea へ至るようになるまでにどれほどかかるのか知る方法はありません。¹⁷⁾ [GA, 23]

還元の移行そのことが語られている。その<還元>を通じて、メタフィジクスにおいて、生きられる世界への還帰とともに、「或る idea へ至るようになる」、idea が「発生する」と言われている。idea は「design を主導する (drives)」と言われ、idea という語は、この箇所に限らず、design と対になるように用いられる。

そして idea は、つぎのように、コンセプションともコンセプトともオーダーとも言い換えられるが、しかし idea という語が用いられるときには、「卓越する (excellent) コンセプト」、「或るイデア的なもの (an ideal)」といった特別な意味において用いられる。

建物の site は建物のコンセプションをつくりだしたんなる因子以上のものである。¹⁸⁾ [An, 9]

新しい作品が固有の諸条件をことごとく反転させるものであったとしても、その作品のオーダーは、或る相貌を体現しようとするし、抽象的空間のもつ一般性とは別もののそこにはかない或る個別の意味を照明して際立たせようとする。或るイデア的なものは個別的なものにおいて存在する。¹⁹⁾ [An 9]

site, 文化、プログラムが与えられると、或るオーダーが、或る idea が、

かたちづけられるといえる。しかしその idea はまだコンセプションにすぎない。²⁰⁾ [An, 10]

コンセプトはばらばらな諸部分を厳密な志向で結びつける隠れた糸としてはたらく。²¹⁾ [St, 22]

idea は、抽象的事象ではなく、建築のプログラムと融合され、建物を作用させる原理として発現するものである。²²⁾ [QP, 119]

卓越するコンセプトとはどんなものか。その強さあるいは弱さをどのように解釈できるであろうか。複雑な諸要素の多重な関係がひとつのコンセプトによってまとめあわされるのである。或るコンセプトの明確さ、明瞭さは、或る状況に限定されており、site とプログラムに意味を築くことができる。組織する idea は、ばらばらな諸部分を厳密な志向で結びつける隠れた糸である。組織する ideas は、ばらばらな建築諸要素をより大きなひとつの全体へ束ねてゆくことのできる発見的考案である。²³⁾ [In, 15]

建築はコンセプトと形態の有機的なつながりである。²⁴⁾ [In, 15]

全一的な表現のなかに何重もの諸ファクターや諸要素を包み込んでいる idea ²⁵⁾ [In, 15]

idea と design との対化に対応するように、design を言いかえるかたちで「形態」、「複雑な諸要素の多重な関係」、「ばらばらな諸部分」、「ばらばらな建築諸要素」などが用いられている。idea はそれらを「より大きなひとつの全体へ束ねてゆくことのできる発見的考案」、「厳密な志向で結びつける隠れた糸」などと言われる。超越論的な移行に基づけられた idea の形相の意味が言われているのである。

5. 方法論の構造

——生きられる世界

ホールの idea と design との対化、メタフィジクスとフィジクスとの対化、これらへは、つぎの図式 4 の有する構造にさらに示唆されることで、より適切な構造的布置を見いだすことができる。

建築制作者であり建築思考者であった増田友也（1914-1981）が、現象学的〈還元〉にかかわる構造を存在論の構造図式として示したものである²⁶⁾。

図式 4

増田は、「存在論的な差異、あるものとあるということとは全く違う」、「ありつつあるものがありつつある以前にはあるのですね。ありつつあってしまえば、Seiende」、「ありつつあるものがあるてしまえばものになるし、ならない前は Sein があって」、「中途半端な状態、そういう中間的領域、それをいま sei-end というもので、あらゆるあるもののありつつあるその途中の状態としてもものを全部見ていく」、「分かりやすく言うと、Sein は Sein と sei-end とに分かれる。そしてこの sei-end の方は、これ自体ありつつあるということ sei-end と、そして大文字の Seiende と、こういうふうに分かれる。つまり二義性は両義性が二重になっている」、「存在論的差異というのは、非常に図式的に考えれば、こういう二乗の構造をもっている」と説明する²⁷⁾。この増田の説明をもとに図式 4 を図式 3 と対応させて図式 5 をえがきうる。

Seiende ——— sei-end

フィジクス

sei-end ——— Sein

メタフィジクス

図式 5

ホールの言う idea はメタフィジクスに所在していた。idea は Sein (ある) の直後の sei-end (ありつつある) にあたり、design は Seiende (あるもの) になる前の sei-end (ありつつある) にあたる。design はフィジクスに所在する。ホールにおける Sein (ある) は、〈あいだ〉とよばれる〈絡みあい〉によって織り上げられる〈肉 (flesh)〉> [In, 16] であり、Seiende (あるもの) は、site という場所のもつ〈見かけ (appearance)〉> [An, 9]、とホールの言うときのその〈見かけ〉などにあたる。これらを図式化するとつぎのようになる。

appearance, etc. (site) ——— design

フィジクス

idea ——— flesh (site)

メタフィジクス

図式 6

ホールは言う。

[site との] 或るつながりを通して、延長される動機を通して、建物は site にたんにみかけのうえで合わせてつくられたにすぎないもの以上のものとなる。²⁸⁾ [An, 9]

site の最初の知覚から養われてきた ideas や、発端の思索への熟慮や、存在する地形の見直し、これが、創作の骨組みとなりうる。このような創作は、普遍的空間 (ユニヴァーサル・スペース) とは別ものの相対的空間をととして焦点を合わされる。それは有限な領域 [個別の土地] におけるものである。建築とは、ひとつの延長である。つまり、或る場所に関して絶対的な意味を創設する、ひとつの様態変化である。²⁹⁾ [An, 9]

建築的思索は idea によって創始された現象を通じた働きである。「つくること」によってわれわれは、idea が現象へと延長する種子にすぎないことを自覚する。³⁰⁾ [An, 11]

建築作品を体験することの本質、いいかえれば建築作品の基底的感覚的な現象、これは、そのコンセプチュアルな志向のなかにしっかりと入れられている。たとえコンセプトと現象とのあいだの直接的な結びつきがゆるいようにみえるときでも。³¹⁾ [TM, 115]

idea は、「現象へと延長する種子 (a seed for extension in phenomena)」にすぎないと、「延長される動機 (an extended motive)」等であるとされているが、ここで言われている idea からの現象への延長とは、図式 6 における、ちょうど idea と design との狭間の、切るがしかし結ぶ、二点鎖線あたりに所在することにほかならない。

この図式 6 ではしかし還元と超越の移行が全一的には示されない。したがってこの図式 6 に加えてそれと同伴する図式をえがくために、ふたたび図式 3 と図式 2 に帰りがいたものがつぎの図式 7 である。図式 7 の上左から下右へ、idea もしくは design の位置を経るルート

図式7

で、還元移行がなされ、逆の方向のルートで超越移行がなされることを示す。その断片をあらわすホルの言葉の一例としてたとえば、図式7と図式6における idea と flesh との間にあたる還元と超越について、「メタフィジカルに不可分であり、現象学的に絡みあう (metaphysically inseparable, phenomenologically intertwined) [QP, 129]」というものもある。つまり、ホルにおいて建築家はこれら還元移行と超越移行の可逆性のうちに制作していくことになる。しかしこの図式7では、増田の言う二義の sei-end の切れるとともに結びあうかたちでの対化と重なり合う、ホルの idea と design の対化が示せない。その、design を主導する idea [GA, 22/ 23/ 25/ TM, 115/ In, 11/ 15], というホルの言葉にあらわされるフィジクスに所在する design とメタフィジクスに所在する idea のつながりは、図式6により明示される。

図式6も図式7もそれぞれ全体が「存在論の地図 (ontological map) [In, 15]」であり、二点鎖線以上が存在者の地図である。図式7には二点鎖線を入れなかった。四者の関係がたんにリニアなルート上の関係にのみあるのでなく、四つの態度としての四者がさまざまな組み合わせでそれぞれが映しあうダイナミックさをもつことも含みあわすことができおらねばならず (そのダイナミックさに含まれる重要な明示すべきひとつのかたちとして図式6の諸対化のかたちもあり), 図式7において二点鎖線を引くとこのダイナミックさを削減させて見せてしまうおそれがあるからであり、すでに図式6で二点鎖線が引かれ存在論的差異の関の位置は明示できているからである。この意味でも図式6と図式7とは一対となって補完し合うかたちでホルの方法論的存在論的構造を示すものとなる。

6. まとめ

第2章において、ホルの方法論へのメルロ＝ポンティの思索の影響が見られ、現象的建築というホルの概念を指し示す言葉の構造が図式化された。第3章では、現象学的還元にあたる行為とともに開示される事態に覚醒しつつ制作することが建築家の目指すこととホルにはとらえられているということ、が見られ、同時に、現象学的還元にかかわる図式である図式2の有する構造に示唆されて、ホルの考える建築することにおけるフィジクスとメタフィジクスが図式化される。そこではホルにおけるフィジクスからメタフィジクスへの移行とは現象学的には超越論的移行のことであることが示される。第4章では、ホルにおいて idea とよばれることが、メタフィジクスとよばれる現象学的還元移行においてみいだされるということ、が明らかになるとともに、その idea が、超越的・存在的位相に所在する design との対化においてもあるということ、が見られた。第5章では、前章までの考察にもとづくとともに、増田友也の示した構造図式である図式4とそれを説明する増田の言葉に示唆されて、ホルの方法論的存在論的構造の全幅が図式化をともなって考えられる。

現代建築の動向のなかで、建築が「深み (depth) = 奥行き (depth) の次元を欠いている³²⁾ [GA, 32]」と言うホル³³⁾は、切実な問題を提起しているように思える。かれ自身がこの時代の建築家であり、自らの蘇生の道を手探りするかのように実作をくり返している。そして作品化という実践以上にかれの論理 (ロゴス) は妥当にみえる。ゆえに、かれの作品形成にかかわる言葉がもつ構造の、本稿のごとき解明も、いまくり返し為されるべきであるように思える。

注

- 1) Kenneth Frampton, *Steven Holl Architect*, Electa Architecture, 2003 (Electa, 2002), 382-403 頁の 'chronology of works' と 409 頁の 'bibliography' 内 'Writings by Steven Holl'.
- 2) 図式2と図式4.
- 3) The intertwining has a "between" that alternates from within to without. Our body moves through and, simultaneously, is coupled with the substances of architectural space
- 4) 本文中におけるホルの言葉引用文献の略号は以下による。
(本文中では略号の後に引用部頁番号を記す。)
[An]; Steven Holl et al., *Anchoring, Third Edition*, Princeton Architectural Press, 1991.
[St]; S. Holl et al., *Steven Holl, Artemis & Arc en Reve Centre d'Architecture*, 1993.
[QP]; S. Holl et al., 'Questions of Perception: Phenomenology of Architecture,' *a+u Special Issue* (July 1994), a+u Publishing, 1994.
「知覚の問題——建築の現象学」(『a+u 建築と都市 1994年7月別冊』, エー・アンド・ユー, 1994)。
[GA]; S. Holl et al., 'Steven Holl', *GA Document Extra 06*, A.D.A. EDITA Tokyo, 1996. 「スティーヴン・ホル」(『GA Document Extra 06』, エーディーユー・エディタ・トーキョー, 1996)。
[TM]; S. Holl, 'Twofold Meaning', *Kenchiku Bunka* (August 1997), SHOKOKUSHA Publishing, 1997. 「特集＝スティーヴン・ホル 二重の意味」(『建築文化 1997年8月号』, 彰国社, 1997)。
[In]; S. Holl et al., *Intertwining*, Princeton Architectural Press, 1998.
ホルの言葉については、日本語への翻訳が上の文献に含まれる場合にも、本稿のために上の文献の原語からすべて翻訳し直している。
- 5) In a three-dimensional triad, the reciprocal insertion of the body – oneself – in the interwoven landscapes of architecture yields identity and difference. This insertion of oneself is an intertwining of one in the other of architecture.
- 6) たとえば, Maurice Merleau-Ponty, *La Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945. (モーリス・メルロ＝ポンティ, 『知覚の現象学 1』, 竹内芳郎, 小木貞孝共訳, みすず書房, 1967年, 184頁。)
- 7) ハイデガーのいう「日常性 (Alltäglichkeit)」のことである。Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 1927. (マルティン・ハイデガー, 『存在と時間 I』, 原佑, 渡邊二郎共訳, (中クラシックス) 中央公論新社, 2003年, 109頁, 「現存在の日常性」というこうした無差別のすがたは、なにものでもないものではなく、この存在者の一つの積極的な現象的性格なのである。こうした存在様式から出て、こうした存在様式のうちへと帰るのが、すべての実存することのありのままのすがたなのである。われわれは現存在のこうした日常的な無差別のすがたを平均性と名づける。)
- 8) 上掲書, 『知覚の現象学 1』, みすず書房, 12-13頁。

- 9) an “architecture of intertwining” is connected with a phenomenal architecture of everyday experience
- 10) Merleau-Ponty, M., *Le visible et l'invisible, suivi de notes de travail*, Gallimard, 1964. (M. メルロ＝ポンティ, 『見えるものと見えないもの 付・研究ノート』, 滝浦静雄, 木田元共訳, みすず書房, 1989 年。)さらに, Merleau-Ponty, M., *L'Oeil et l'esprit*, Gallimard, (1961)1964. (M. メルロ＝ポンティ, 『眼と精神』, 滝浦静雄, 木田元共訳, みすず書房, 1966 年。)及び, 上掲書。『知覚の現象学 1』, みすず書房。)
- 11) 筆者がここにえがいた図式2は, 前田忠直に筆者が京都大学大学院の「建築論特論」において教示された, オスカー・ベッカーによる図式である。ベッカー (Oskar Becker, 'Die Philosophie Edmund Husserls,' in (*Kant-Studien* 35, 1930) *Husserl / Wege der Forschung; Band XL*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1973) によるものは, つぎの前田の書に示され説明されている。前田忠直, 『ルイス・カーン研究——建築へのオデュッセイア』, 鹿島出版会, 1994 年, 195 頁。
- 12) 世界内属存在的というニュアンスは, 上の注記 7) に引いたハイデガーの語りにきかれるし, メルロ＝ポンティのつぎのような語りにきかれる。
徹底的な反省 (réflexion radicale) は自分自身が非反省的生活に依存していることを意識しており, この非反省的生活こそ反省の端緒的かつ恒常的かつ終局的な状況である, ということでもある。現象学的還元とは, 一般に信じられてきたように観念論哲学の定式であるどころか, 実存的な哲学の定式なのであって, それゆえハイデガーの〈世界＝内＝存在〉 (In-der-Welt-Sein) も, 現象学的還元を土台としてのみ現われたのである。
(上掲書, 『知覚の現象学 1』, みすず書房, 13 頁。)
- 13) Our aim is to realize space with strong phenomenal properties while elevating architecture to a level of thought.
- 14) It [site] is its [building's] physical and metaphysical foundation.
The resolution of the functional aspects of site and building, the vistas, sun angles, circulation, and access, are the “physics” that demand the “metaphysics” of architecture. ...
Building transcends physical and functional requirements by fusing with a place, by gathering the meaning of situation. ... Illumination of a site is not a simplistic replication of its “context”; to reveal an aspect of a place may not confirm its “appearance”. Hence the habitual ways of seeing may well be interrupted.
Architecture and site should have an experiential connection, a metaphysical link, a poetic link. /...
A building has one site. In this one situation, its intentions are collected. ...
... Architecture and nature are joined in a metaphysics of place.
- 15) ホールの述べるこの「遮断」は, フッサール (Edmund Husserl) により現象学的に用いられはじめ, メルロ＝ポンティも受け継ぐ「エポケー (εποχή)」にあたる。Edmund Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Erstes Buch, Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*, (1913-)1950. (エドムント・フッサール, 『イデーネー I-1』, 渡辺二郎訳, みすず書房, 1979 年, 139 頁以降。)
- 16) ホールの「メタフィジクス (metaphysics)」の語の用法は, 本質存在と事実存在の裂開以前の〈存在〉 (= 現象) をみようとする態度を意味するゆえ, フッサールの「非実在 (Irrealität)」に符号する。上掲書, 『イデーネー I-1』, 53-55 頁。
- 17) the site is unique, and therefore the idea that drives the design, the force that drives the design has to be generated around that locus of circumstances. In the beginning I intuitively drift. I'll write words and sentences make a lot of drawings and sketches. There's no way of knowing how long it will take to get to an idea.
- 18) The site of a building is more than a mere ingredient in its conception.
- 19) Even when a new work is an inversion of inherent conditions, its order attempts to embody an aspect, or illuminate a specific meaning distinct from generalities of abstract space. An ideal exists in the specific;
- 20) When site, culture, and program are given, an order, an idea may be formed. Yet the idea is only conception.
- 21) The concept acts as a hidden thread connecting disparate parts with exact intention.
- 22) ideas are not abstractions – but become fused with architectural programs and emerge as the working principles of a building.
- 23) What is an excellent concept? How can we interpret its strength or weakness? A manifold relation of complex elements are held together by a concept. A concept's distinctness and clarity is limited to a situation and can build meaning into a site and program. The organizing idea is a hidden thread connecting disparate parts with exact intention. Organizing ideas are heuristic devices that can tie disparate architectural elements into a larger whole,
- 24) It is an organic link between concept and form.
- 25) the idea that wraps manifold factors and elements in a whole expression
- 26) 図式4は, 増田友也が『建築以前』と題する講義 (1973 年) でえがいている図式 (増田友也, 『増田友也著作集 V』, ナカニシヤ出版, 1999 年, 41 頁) を筆者がここにえがき直したものである。この増田の図式も, 上の注記 11) にふれた前田忠直の書にすでに示され論じられている。上掲書, 『ルイス・カーン研究』, 198 頁。
- 27) 上掲書, 『増田友也著作集 V』, 40-42 頁。
- 28) Through a link, an extended motive, a building is more than something merely fashioned for the site.
- 29) Ideas cultivated from the first perception of the site, meditations upon initial thoughts, or a reconsideration of existing topography can become the framework for invention. This mode of invention is focused through a relative space, as distinct from universal space. It is in a bounded domain. Architecture is an extension; a modification establishing absolute meanings relative to a place.
- 30) Architectural thought is the working through of phenomena initiated by idea. By “making” we realize idea is only a seed for extension in phenomena.
- 31) The essence of experience, the basic sensory phenomena of an architectural work, is bound up in its conceptual intentions, even if the immediate bond between concept and phenomena seems loose.
- 32) [architecture today, it] lacks the dimension of depth
- 33) ホールの言う〈深み＝奥行き〉とは〈現象的〉身体における事柄のことであり, 〈絡みあい〉や〈交叉〉という語によっても示されることに重なりあう事柄のことである。

(2006年9月4日原稿受理, 2007年3月27日採用決定)